



インテリジェントでクラウド対応のコンテンツソリューションの登場

機敏でインテリジェントな情報管理で、
未来に向けて成長


HYLAND™

目次

急増する情報管理の必要性	3
情報管理の6つのV	4
進化するECMのニーズ	5
コンテンツサービスが現状を打破する4つの分野	6
■ 情報アクセス	7
情報アーキテクチャ	7
■ インテリジェントコンテンツソリューション	8
コンテンツインテリジェンス	8
■ ビジネスオートメーション	9
AIによる自動化	9
■ ソリューションの作成	10
ローコードソリューションの作成	10
未来創り	11
ハイランドについて	12

急増する情報管理の必要性

組織は常にビジネス情報を効果的に管理する必要があります。しかし、今日、使いやすさとセキュリティ、リモートワークとコンプライアンスの両面でバランスを取る必要があります。IT部門はこれまで以上にプレッシャーを受けています。この圧力は、職場環境の急速な変化やハイブリッドワークの要件により最近さらに高まっており、組織は複数の多様な領域で適応を迫られています。

急速に変化する不確実な時代では、ビジネスで守りの姿勢を取ることは当然なことだといえますが、賢明な組織はその逆の行動を取ります。不安定な環境にあっても目標を達成し、危機に際して賢明な投資を実行する企業は、将来その成果を享受する上で最適な立場にあります。

ビジネスに不可欠な情報の管理は、最も基本的で重要な分野の1つです。

このeBookでは、組織が変更の管理、リスクの抑制、ビジネス価値の向上を情報管理によって実現する理由と、そうした要求にクラウドコンテンツサービス・プラットフォームがどのように対応するかについて説明しています。



ビジネスに不可欠な情報の管理は、
最も基本的で重要な分野の1つです。



情報管理の6つのV

情報管理分野における変化のきっかけは、パンデミックだけではありません。

Vで始まる6つのワードが示すように、情報管理では重要な情報とコンテンツを処理するための、より優れたビジネスソリューションとプラクティスのニーズが強まっています。これらは、あらゆる規模の組織でプレッシャーを増大させます。

1 Volume (量)

生成されるデータとコンテンツの量組織が受け取る情報は、保存・処理する能力よりも速いペースで増加しています。この傾向がすぐに減速する兆候はありません。

2 Variety (多様)

現在のコンテンツは、スキャンされたオフィスでの文書だけではありません。動画、画像、SMSメッセージ、非構造化データなど、多岐にわたるコンテンツが含まれます。

3 Velocity (速度)

情報が生成される速度は増している一方で、情報が意思決定を支援したり自動化したりする速度も速くなっています。これは、企業のSLAを満たすためにインテリジェントな自動化を必要とします。

4 Variation (変化)

組織は、さまざまな情報源、リポジトリ、業務システムからの情報を組み合わせて管理する必要があり、情報へのアクセスとアクションの自動化の両方のためにシステム間の統合が求められます。

5 Value (価値)

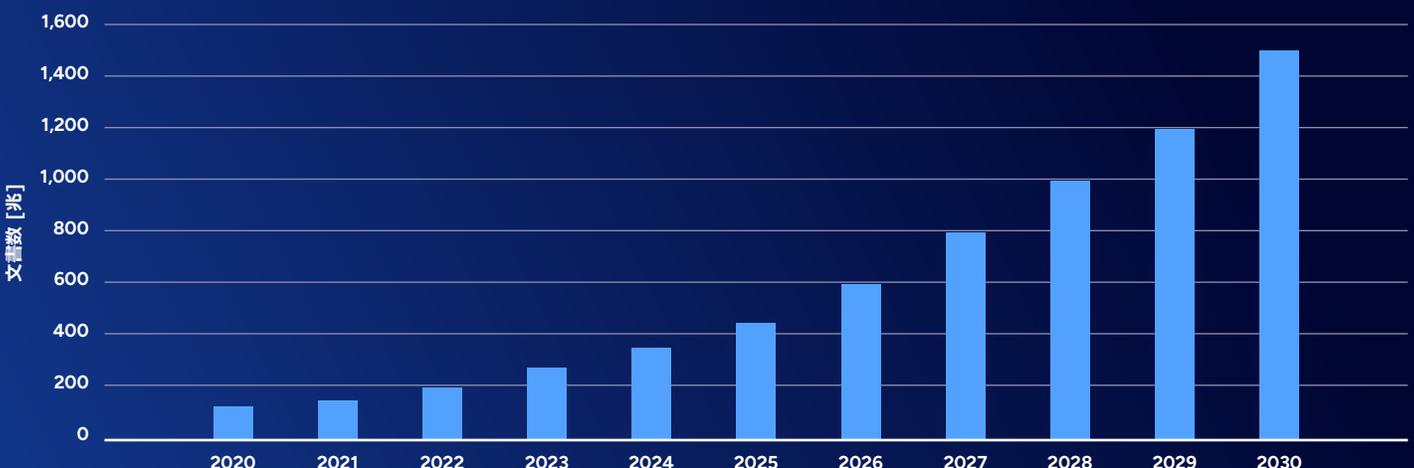
企業全体に存在する非構造化データは、重要な核となるものです。重要な業務プロセスの中核を成す要素であるため、効果的な識別、データ抽出、ルーティングが不可欠です。

6 Visibility (可視性)

組織が成長するにつれて、管理する情報サイロやシステムの数も増加します。これらの無数のツールから情報を探し出して管理するには、洗練されたソリューションが必要です。

企業内で情報を管理するために使用する従来のツールは、エンタープライズコンテンツ管理 (ECM)システムです。しかし、多くの時代遅れのレガシーECMプラットフォームは、現実世界のビジネス上の課題への取り組みとソリューションの提供に苦勞しています。

過去5年間と今後5年間



進化するECMのニーズ

エンタープライズコンテンツ管理プラットフォームは、2000年代の初頭から存在しており、あらゆる規模の組織内で文書やデータを管理・制御することが実証されています。しかしながら、2000年代のビジネス界は、2020年代の現在の世界とは大きく異なっていました。そのため、情報管理に使われた戦略とツールを近代化する必要があります。最新のコンテンツ管理への転換に関して考慮すべき点がいくつかあります。

旧式化したプラットフォーム

従来の多くのECMプラットフォームには、ECMが世に出されたときと同じモノリシックなフレームワークが残っています。これにより、機能が制限され、最新のソリューションとの統合が課題となり、アドオンの開発とメンテナンスのサイクルに費用がかかっています。

クラウドの制約

一部のECMベンダーとその顧客は当初クラウド導入に慎重でしたが、いつでもどこでもコンテンツにアクセスできることや情報セキュリティへの信頼性向上の必要性が、ますます多くの企業にクラウド移行を促しています。ただし、組織内のコンテンツ管理戦略とツールがクラウドに対応し、クラウド上で完全に機能すると保証することが主な要件となります。

イノベーションの制約

最新のインフラストラクチャの再構築に注力するあまり、特定のレガシーベンダーのイノベーションや新機能が低下する場合があります。これらのプラットフォームを利用し続けると、人工知能（AI）や機械学習、インテリジェントオートメーション、コラボレーションやビジネスアプリケーションとの統合、最新で簡素化された管理およびユーザーインターフェースといった新たなコア機能を活用できず、重大な競争上の不利を被ることになります。

継続する高額な実装費

ほとんどのECMシステムの導入には、慎重な計画、長期にわたる開発サイクル、そして十分なユーザー教育が必要です。これを組み合わせると、特に最新のプラットフォームで利用できる柔軟な月額料金モデルや広範なカスタマイズオプションと比較した場合、実装コストが高くなります。

情報スプロール

組織内のすべてのコンテンツを1つのシステムで保存するという長年の主張にもかかわらず、ベンダーはこの約束を果たすことができず、複数の切断された情報システムが展開されました。そのいずれもが互いに連携するように設計されていませんでした。その結果、老朽化したプラットフォームや放置されたコラボレーションサイト、部門ごとに孤立したソリューションが乱立し、未構造化データを活用して迅速に意思決定を行い、業務効率を向上させることが困難、あるいは不可能になっています。



コンテンツサービスが現状を打破する4つの分野

ガートナーは、「エンタープライズコンテンツ管理」という用語は、もはや市場のダイナミクスに適合せず、「コンテンツサービス・プラットフォーム」が推進する「コンテンツサービス」に置き換える必要があるとしています。コンテンツサービス・プラットフォームは、ECMの次の進化であり、旧式化したECMプラットフォームが直面する課題を解決する機会だと考えています。コンテンツサービスは、ビジネスを広い視野で捉えているのです。以下では、戦略的なコンテンツサービスのアプローチで考えが変わる4つのビジネス分野に焦点を当てています。



情報アクセス:

デバイス、時間、場所を問わず、情報へのアクセスを向上



ビジネスオートメーション:

タスクを効率化し、意思決定を改善し、生産性を向上させるインテリジェントな自動化によるプロセスの加速



インテリジェント・コンテンツ・ソリューション:

非構造化データをAI対応コンテンツに変換し、隠れたインサイトを明らかにするとともに、カスタマイズされたエージェント型AIソリューションを支援します



ソリューションの作成:

ビジネスに重点を置いたソリューションをより迅速かつ安価に構築し、その後のメンテナンスも容易

以上のように、情報管理の必要性は、かつてないほど高まっています。最新のコンテンツ管理ソリューションを活用することで、組織は単なる情報管理を超えて真のデジタルトランスフォーメーションを実現できます。料金は利用量課金、サブスクリプション、永久ライセンスモデルなど柔軟に設定可能です。

移行の準備はできていますか？





情報アクセス

ハイブリッドワークへの急速な移行から教訓を得たとすれば、それは「いつでも、どこでも、どのデバイスからでも情報にアクセスできる必要がある」ということです。情報管理者にとって、これはコンテンツにアクセスするためのリモートツールやモバイルツールを利用できること、また、以下のようなコンテンツ中心のビジネス分野とやり取りできることを意味します。

- ビジネスワークフローの実行
- 光学式文字認識 (OCR)、翻訳、文字起こし、感情分析などのクラウドネイティブサービスへの統合
- ローコード開発ツールを使用した、新しいカスタム/ビジネス固有のソリューションの作成
- 企業の情報資産から価値を引き出すための分析およびAIの活用

ナレッジワーカーにとって、これは、Eメールシステム、コンテンツ作成ツール、ERPやCRMビジネスシステム、ネイティブなコンテンツサービスインターフェイスなど、あらゆるビジネスシステムからすべてのコンテンツにシームレスにアクセスできるということです。セルフサービスポータルへの投資が増えていることで、ユーザーは文書やデータをシステムに追加したり、製品選択、ローン申請、アカウント管理などのアクティビティ用の独自のワークフローを作成したりできます。

お客様は、権限を得られることに喜びを感じます。コンテンツサービスの観点では、シンプルなモバイルアプリから、完全にクラウドネイティブアーキテクチャ上に構築された究極のコンテンツサービス・プラットフォームまで、クラウドの力を活用した一連のオプションが連鎖的に提供されるということです。

鍵となるソリューション

情報アーキテクチャ

今日のコンテンツ・プラットフォームは、従来のECMの枠を超えています。これらはAI対応で、クラウド提供されており、自動化、アプリ開発、ガバナンスを目的に設計されています。生成AIは、組織のコンテンツ作成、変換、分析の方法を強化し、成果と生産性を向上させます。それでも、成功は中核的な能力とベンダーの専門知識に依存します。

Gartnerは文書管理を定義しています 企業全体でコンテンツをキャプチャ、保存、処理、アクセスするためのツールと実践のことです。企業データの最大80%が非構造化データであるため、価値を引き出し管理を維持するには効果的な管理が不可欠です。これらのニーズを支援するため、最新のクラウド対応情報アーキテクチャは以下の主要なメリットを提供します。

無限の可能性

クラウドには、比類のない柔軟な拡張性があります。一例として、大学での願書受付シーズン中に処理能力を拡大させ、休暇中には、リソースを縮小できることが挙げられます。

制御可能な総所有コスト

クラウドアーキテクチャでは、維持費の削減、リソース管理の簡素化、長期的なプラットフォーム所有コストの管理強化が可能です。

マイクロサービスアーキテクチャ

モジュラスケーリングを活用するクラウド型プラットフォームは、新しいクラウドネイティブなサービスによって優位性があります。

イノベーションへの即時アクセス

クラウド型プラットフォームで利用されているソフトウェア管理の絶え間ないイノベーションや配信モデル (CI/CD) では、ユーザーが介入することなく即時に更新プログラムを展開できます。

複数の統合オプション

クラウド型ソリューションは、コンテンツアクセスを他の業務アプリケーション内に簡単に統合する機能を提供します。クラウドベースのSalesforce CRMでお客様レコードに関連するコンテンツを提供する場合でも、オンプレミスの人事ソリューションで履歴文書へのアクセスを提供する場合でも、柔軟で迅速な統合がビジネスに大きなメリットをもたらします。





インテリジェントコンテンツソリューション

2025年のForresterの調査によると、AIがコンテンツ管理面で重要な目標達成の可否を握る大きなまたは重要な要因となると予想する意思決定者の割合は74%に達しています。つまり、今こそコンテンツインテリジェンスを検討、導入する好機と言えます。

最新のインテリジェント・コンテンツ管理システムは、従来の単独ソリューションと区別されるいくつかの主要な特徴を備えています。

- 効率性を新たなレベルを引き上げるためのAIの活用。AIおよび機械学習モデルは、コンテンツのスケーリングと集約を支援します。特定したツールが、非構造化コンテンツを実用的なインテリジェンスに変換することに特化していることを確認します。
- 柔軟性と拡張性の向上。エンタープライズアプリケーションとシームレスに統合されるソリューションを優先してください。拡張性により、ソリューションビルダーはテクノロジー投資から最大限の価値を引き出すことができます。
- オープンスタンダード。将来を見据えた組織が次のモダナイゼーションの段階を検討する際には、今後数年間や利用可能な特定のソリューションにとどまらず、より先を見据えることが重要です。特定のベンダーに依存したり専有的な技術ではないものを選択することで、ビジネスのニーズが変化した際に技術を柔軟に変更できる選択肢が得られます。

非構造化データは企業コンテンツの80%を占め、オンプレミスおよびクラウドの複数のリポジトリに分散しています。適切なツールがなければ、このデータは活用されず、その価値を制限してしまいます。しかし、適切に活用されれば、非構造化データはイノベーション、自動化、デジタルトランスフォーメーションの触媒となります。

非構造化コンテンツをAI対応データに変換することで、組織はコンテキストに基づくインサイトを統合し、AIによる自動化を推進するとともに、データ品質とガバナンスの堅牢なフレームワークを構築できます。これにより、単に合理化だけでなくこれにより、業務の効率化だけでなく意思決定の迅速化や生産性の向上も実現し、従業員はより価値の高い業務に専念できるようになります。

コンテンツインテリジェンスにご興味がありますか？

▶ [コンテンツ管理を抜本的に変革する5つのAI駆動型のHylandツールをご覧ください。](#)

鍵となるソリューション

コンテンツインテリジェンス

情報ライフサイクル全体にAIを組み込むことで、生データを戦略的価値の推進力に変え、これらの課題に対処します。このアプローチは、より賢明な意思決定、主体的な自動化、イノベーションを推進し、成長のための新たな機会を開拓します。

データキュレーション

600以上のファイル形式のコンテンツや非構造化データを、AIエージェントやシステムで利用可能な構造化されたAI対応データに変換します。

コンテキストエンリッチメント

非構造化データを関連するコンテキスト情報と結び付けることで強化し、検索性を向上させるとともに、より深いインサイトと高度なコンテキスト理解を提供します。

AIを活用した検索

複数のコンテンツリポジトリやその他のデータ生成ツールから実用的な情報を引き出し、情報の統合的なビューを提供します。

AIが生成した出力を検証する

AIが生成した応答で使用されたドキュメントを確認し、簡単に開いて正確性を確認したり、詳細を読むことができます。

Agentic AI

大量のコンテンツを読み取り、適切な判断を行い、アクションを実行できるエンタープライズ向けAIエージェントを構築します。これらのエンタープライズエージェントを新規および既存のワークフローに組み込み、そのライフサイクルを管理し、必要に応じて人間による監督を提供します。

非構造化コンテンツをAI対応データに変換することで、組織はコンテキストに基づくインサイトを統合し、AIによる自動化を推進するとともに、データ品質とガバナンスの堅牢なフレームワークを構築できます。これにより、業務の効率化だけでなく意思決定の迅速化や生産性の向上も実現し、従業員はより価値の高い業務に専念できるようになります。





ビジネスオートメーション

業務プロセスを自動化することで、効率の向上からコストやエラーの削減まで、組織に大きなメリットをもたらします。初期の文書管理システムは、主にコンテンツの保存、検索、取得を中心とした基本的な自動化機能しか提供していませんでした。時間の経過とともに、ECMシステムは、承認ルーティング、電子署名、保存管理など、コンテンツに関連する一般的な業務ワークフローやアクションの高度な自動化を提供するようになりました。

しかし今日では、従来のECMシステムは、現代の組織が求めるレベルの自動化機能を提供することが困難です。以下は、現代の組織が従来のECMにおいて自動化のギャップを痛感している領域の一例です。

- 受信コンテンツを自動的に処理し、データを正確に抽出して、人間の介入なしでビジネスシステムに入力すること
- 混在した一連の書類（例：入社手続き書類）を、処理のために各文書タイプ（例：税務書類、身分証明書、請求書など）ごとに正確に分離すること
- 入力されたデータを、基幹システムと自動的に照合して検証すること（例：請求書金額と発注書金額の比較）
- 最新の業務システムと統合し、データ入力、照会、検証を自動化すること
- 複数の企業リポジトリからコンテンツを検索し、タスクや案件に基づいて関連するコンテンツやインサイトを自動的に提示すること
- 監査およびコンプライアンスのために、あらかじめ作成されたレポートやダッシュボードを提供すること
- AIを活用して、一般的なユーザー作業を自動化または簡素化すること
- 大量の記録を処理・管理するスケーリング能力を持ち、季節的な処理量の変動にもコスト効率よく対応すること
- ユーザーが技術的な専門知識を必要とせずに自動化を構築できる簡単なツールを提供すること

幸いなことに、現代のコンテンツサービスプラットフォームは、今日の組織が必要とするすべての自動化機能を提供し、新たなレベルの効率性と革新を推進することを可能にします。

鍵となるソリューション

AIによる自動化

最新のコンテンツサービスは、強力な自動化機能を提供するだけでなく、AIの力も活用できるようにすることで、組織がコンテンツをより迅速かつ正確に処理し、ほぼすべてのデータ中心の作業を自動化し、ユーザーや顧客が必要とする情報を容易に見つけ、関連するインサイトを提供して意思決定を改善できるようにします。

以下は、最新のコンテンツサービス・プラットフォームを導入することで、組織が得られる自動化機能の一例です。

- **インテリジェントドキュメント処理 (IDP)** : AIの力を活用して、文書を自動的にキャプチャ、分離、分類し、関連データを抽出します。
- **プロセス・オーケストレーション** : 関連するコンテンツを、レビュー、署名、承認などの業務タスクのために、適切なワークフロー、システム、または担当者に自動的に振り分けます。
- **システム統合** : 異なるシステムやアプリケーションを接続し、組織全体でデータとプロセスの円滑な流れを促進します。
- **生産性向上機能** : 自動化されたキュー管理、通知、リマインダー、インサイトを活用し、ユーザーが業務量を効率的に管理できる適切なツールを提供します。
- **ケース管理** : 非構造化ケースや知識主導型プロセスにおけるデータ、タスク、活動、やり取り、イベントを管理します。
- **エージェント型プロセス自動化** : AIエージェントを活用し、事前に定義されたスクリプトなしで、複雑なタスクやビジネスプロセス全体を自律的または半自律的に実行します。
- **コンテンツ自動強化** : 生成AI (Gen AI) を活用し、ユーザーがプロンプトに基づいて情報を発見し、オンデマンドでコンテンツ分析やインサイトを得られるようにします。
- **直感的なローコード自動化構築** : 生成AI搭載のプロンプトとシンプルなビジュアルデザインツールを活用して技術的な専門知識を必要とせずに自動化を構築することができます。

これらおよびその他の多くの自動化機能を備えた最新のコンテンツサービスプラットフォームは、面倒で反復的なデータタスクからユーザーを解放し、従業員の疲労を軽減し、より価値の高い作業に集中できるようにします。

適切な自動化テクノロジーを活用することで、ボトルネックを解消し、業務プロセスをより迅速、安定、正確に最適化することができ、顧客体験の向上につながります。





ソリューションの作成

組織は、それぞれがユニークであり、市販のソリューションが特定のニーズや課題に対応できることは、ほとんどありません。つまり、企業向けITソリューションの購入では、ビジネスに特化したカスタマイズが必要になります。しかし、従来のECMシステムの多くは、プラットフォーム上で有益なソリューションを開発するために必要なツールの品質に欠けています。

現代の組織では、情報管理を含むあらゆるビジネス分野で機敏性が求められています。つまり、以下のようなツールが必要になります。

- 専用のコンテンツやケース管理ビジネスソリューションの迅速な開発
- 既存のソリューションの迅速な設定とカスタマイズ
- 初期開発や将来の変更とメンテナンスの簡素化
- オープンソース主導をサポートし、オープンソースコミュニティにアクセスしてソリューション開発を迅速化
- 新しいアプリのプロトタイプを作成を加速し、生産性と問題解決を促進
- イノベーションのスピード化

幸いなことに、ほとんどのコンテンツサービス・プラットフォームには、これらの前提条件すべてに対応するツールが用意されています。どのようなツールかといえば、それはローコード開発ツールです。

鍵となるソリューション

ローコードソリューションの作成

ローコード開発ツールは新しいものではありません。ソフトウェア開発のような分野では、長年使用されてきました。Visual Basicを使用してアプリを作成して育った人は、GUIベースの開発ツールに精通しているはずで、同様に、情報管理では、ビジネスプロセスの作成・管理を視覚的に実行するワークフローデザインツールがありますが、最新のコンテンツサービス・プラットフォームでは、ローコードツールが高性能になり、ビジネスに幅広いメリットをもたらしています。以下では、その特長の一部をご紹介します。

- 視覚的かつ宣言的なデザインモデルにより、簡単に習得可能
- 高度なコラボレーションで、ビジネスアナリストとIT開発者の関与が可能
- ラピッドプロトタイピングや迅速なイノベーションを重視
- 反復開発により、開発者は誰でもアプリの改良と維持が可能
- ビジネス重視で、チームが目的に特化したコンテンツとケース管理アプリケーションを迅速に開発し、ビジネス上の問題点を解決問題点

注：ローコード開発ツールは、開発者の少ない多くのチームによる迅速なプロトタイピングを可能にしますが、組織がローレベルのコードを作成する必要がある場合もあります。ローコード環境はカスタムコーディング環境、オープンスタンダード、またはオープンでアクセス可能なアプリケーションプログラミングインターフェイスの必要性に取って代わるものではありません。最新のコンテンツサービス・プラットフォームでは、ローコードからフルコードまで、およびその間のすべての機能とツールを提供する必要があります。



未来創り

AIの台頭により、組織は情報管理の実践に投資し、革新を行う絶好の立場にあります。以前は隠されていた膨大な非構造化エンタープライズコンテンツに構造を与える能力は、コンテンツ管理の新時代の扉を開き、現代のコンテンツサービスプラットフォームはその挑戦に対応する準備ができています。

コンテンツサービス・プラットフォームが情報管理責任者に新しい機会を提供することは明白です。クラウド型ソリューションにより、お客様、従業員、パートナー様は、いつでも、どこでも、どのデバイスからでも、重要な情報に即時に場所を選ばずにアクセスできます。

ところが、未だに多くのビジネスリーダーは、最新のコンテンツサービス・プラットフォームが提供するメリットをどのように入手するかで苦心しています。こうした組織向けに、コンテンツサービスを最大限に活用するためのロードマップを5段階で提示します。

1 想像する

長期にわたり、組織は業務ソフトウェアに対する期待を抑制することを余儀なくされてきました。最新のコンテンツ管理プラットフォームは、これらの制約を取り除き、情報管理のリーダーが、デジタルトランスフォーメーションを推進するビジネスをどのように支援できるかという観点から考察するようにします。

お客様、パートナー様、スタッフに役立つソリューション、プロジェクト、機能の希望リストを作成します。夢を大きく持てば、その結果は華々しいものになる可能性があります。

2 すべての条件を満たす

組織が業務要件を特定した後は、その要件に対応するために必要なコンテンツ管理の基本機能を特定することは、比較的容易であるはずですが。この電子書籍で取り上げられている4つの主要分野を参照してください：コンテンツアクセス、コンテンツインテリジェンス、インテリジェント自動化、迅速なソリューション構築。

すべてのベンダーやコンテンツサービス・プラットフォームには、さまざまな分野での強みがあります。先に進む前に、特定の機能ニーズに合ったものを特定します。

3 レビューを確認する

企業はしばらくECMツールを使用してきました。多くの企業は良い面と悪い面の両方で、自分たちの見解や経験を喜んで共有しています。購買対象となり得るプラットフォームを特定する場合、事例、ピアレビューサイト、アナリストレポートなどが役立ちます。じっくりとこれらのリソースをできるだけ多く確認してください。

4 すぐに試す

今日のコンテンツベンダーは、機敏性と新しいソリューションの作成スピードについて頻繁に言及しています。それらを試しに利用してみましょう。新しいプラットフォームを導入する前に、組織は必ず試用することを検討すべきです。たとえば、概念実証（PoC）を実施する、あるいは明確な目標と成功基準を設定した小規模なパイロットプロジェクトを実施することで確認します。

5 先に進める

プロジェクトの鍵は、プロジェクトを開始させることです。テクノロジーはかつてないスピードで進化し、コンテンツの量は指数関数的に増加しており、最新のコンテンツサービス・プラットフォームへの移行を遅らせるたびに、競合他社が優位に立ちます。古いことわざで表現すると、「何もできない日は2日しかない。ひとつは、昨日で、もうひとつは、明日と呼ばれる日だ。だから今日が実行する日だ」ということです。

最新のコンテンツソリューションは、従来の文書管理システムの単なる後継にとどまりません。ハイブリッドワークへの移行により、過去数年間で組織のデジタル変革は加速したかもしれませんが、最新のインテリジェント・コンテンツプラットフォームは、今後10年以降もその変革を推進し続けることを可能にします。



ハイランドについて

Hylandは、組織が深いインサイトを引き出し、イノベーションを促進できるよう支援しており、組織の運営方法や顧客との関わり方を根本的に再定義します。**Hyland Content Innovation Cloud™**は、コンテンツ、プロセス、アプリケーションのインテリジェンスを統合したプラットフォームであり、未構造化データの潜在能力を最大限に引き出し、前例のない効率性と洞察を得られるようサポートします。AIとクラウド技術を活用することで、企業コンテンツをより強力な資産に変え、デジタルトランスフォーメーションを推進し、新たな成長機会を発見できます。



➤ Hylandの最新コンテンツサービス・プラットフォームと、
将来に向けた当社のビジョンについて詳しくご確認ください。

エンタープライズコンテンツの限界を広げる



